

## Ⅱ 実 践

＜実践例＞ 第3学年 平成30年5月

(渋谷 知 宏)

### 1. 題材名 「トーンチャイムで創作してみよう」(4時間)

### 2. 題材の概要

トーンチャイムとは、細長いアルミ合金の筒状のものにゴム製のハンマーがついており、それを手にもって振ることでハンマーが筒に当たり、振動して音が出る楽器である。これは「音叉」の原理を利用している。いろんな長さのものがあり、一本一本それぞれ固有の音をもっている。シルバー色のはピアノの白鍵、黒色は黒鍵にあたる。一人で演奏することはできず、数人で音を分担して音楽を演奏しなければならない。オルゴールのような、柔らかく、澄んだ美しい音が魅力であり、手にもちやすい形に設計されているため、子どもから大人まで誰もが手軽にトーンチャイムの響きを楽しむことができる。

このような楽器を用いて創作することは、それぞれが自分の担当する音を決め、音を出す順番を考えるだけで旋律を完成させることができるため、作曲と聞いて難しさを感じてしまう生徒にも容易である。また、グループで協力しないと旋律が完成しないため、お互いに教え合うことができる。リズムも自由に考えることができるため、楽譜に忠実に演奏しなければならないという重圧もかからない。これは読譜力に不安がある生徒にとっても抵抗がない。容易に旋律を完成することができれば、旋律の重なりが美しいと思われる組み合わせを探ったり、構成の例を参考にしながら、まとまりのある音楽をつくってみたりとより高度なことに挑戦できると期待した。

本学級の生徒のみならず、本校でトーンチャイムという楽器を用いて授業を行うことはこの題材が初めてとなる。トーンチャイムの楽器について聞いたところ、小学生の時に扱ったことのある生徒が本学級には約7割いた。音を3つ重ねて音を出し、和音の響きの美しさを感じ取ったり、楽器の音色を味わったりしてきていたようである。奏法も簡単で、楽器についているハンマーを打ち付けるように腕を振れば音が出るため、楽しく活動ができたという生徒が多かった。

創作については中学1年の時にリズム創作、2年の時に日本音階で創作を行った。リズム創作の時は、言葉とリズムの結び付きを考えながら四小節の作品をつくっている。多くの生徒は課題を達成させようと熱心に取り組んでいた印象が残っている。しかし、言葉や文章を考えることに夢中になりすぎてリズムの組み合わせが単調になった生徒やリズムと言葉がうまくかみ合わない生徒がいた。日本音階での創作では、作品の完成を目指して、何度も言葉を声に出して抑揚を考えたり、音を出して確かめたりしながら試行錯誤する姿があった。作品ができていく過程に面白さを感じている生徒が多かったが、イメージにあった旋律にならず苦しんでいる生徒や、偶然できた旋律に対して面白さや良さを感じるできない生徒もいた。

昨年度からの課題として挙げていた、指導要領に記載されている〔共通事項〕の音楽を形づくっている要素を知覚することについて、「強弱」「音色」を捉えることができる生徒が多く、「形式」「構成」については少ないというのは変わらなかった。捉えることができる要素を広げることがより音楽と豊かにかかわるために必要であると考えた。



### 3. 指導にあたって

本題材での授業における、資質・能力を発揮している生徒の姿を、以下のように考えた。

創作するテーマに合わせてどのように音をつなげるか、重ねるか、まとめるかについて知覚・感受しながら作品の完成を目指すことができる生徒

#### (1) 本題材で付けさせたい資質・能力

本題材では「トーンチャイムで創作してみる」ことを、題材を貫く課題として設定し、「音素材の特徴を生かし、反復、変化、対照などの構成や全体のまとまりを工夫しながら音楽をつくること。

(第2・3学年「A表現・創作」イ)」に重点を置いて進めていく。「反復、変化、対照などの構成や全体のまとまり」を工夫しながら作品をつくるためには、音を音楽へと構成する楽しさや喜びを実感できるようにするとともに、音楽を構成する要素の働きや、全体的なまとまりが音楽として意味をもたらすことに気付くようにすることが必要である。どのように音をつなげると創作するテーマの雰囲気にならぬのか、どのように音を重ねると美しくなるのか、どのような手順で演奏すると全体のまとまりができるのかについて試行錯誤することは、「音楽を形づくっている要素のはたらきを知覚したこと、音楽のよさや美しさなどを感受したことを関連させる力」を高めることができると考えた。そして、この題材を通じて得たものは、特に全教科共通で重視して育む資質・能力「知識や技能、経験の生かし所を見いだす力」を伸ばすことにつながると考えた。

生徒たちは学年が上がるにつれて、より難易度の高い合唱曲に挑戦していく。やみくもに自分が担当するパートの旋律を覚えたり、単に歌えるようになることだけで終わるのではなく、楽曲を構成や全体のまとまりという視点で捉えることができれば、効果的に練習したり、楽曲のストーリー性を理解しその良さを深く味わったりことができる力へとつながることを期待した。

#### (2) 手立て

学習を進めるにあたり、特に以下の点に留意する。

- ・反復、変化、対照などの構成や全体のまとまりについて理解させるために、創作例を提示し、分析する時間を設けた。



### 4. 授業の実際

#### 学習計画 (4時間計画)

学習活動 (時数)	目指す生徒の姿 (観点)	教師の手立て
1. 課題を理解し、 創作活動をする。 (2)	・音をどのようにつなげるか、 旋律をどのように重ねるか工 夫しながら音楽をつくる学習 に取り組んでいる。  (関・意・態)	・音のつなぎ方や重ね方を工夫させる ために、例を複数示し選択肢を設ける。
2. 作品を発展させ る。 (本時)	★構成や全体のまとまりにつ いて知覚し、自分たちの作品を どのように発展させることが できる。 (創意工夫)	★作品を発展させるために、創作例を 複数提示し、反復、変化、対照などの 構成や全体のまとまりがどのようにな っているか分析する時間を設ける。

3. 作品を完成し、 発表する。 (1)	・これまで学習してきたことを生かして作品を完成するとともに、完成した作品を再現できるように学習プリントに記録することができる。(技能)	・作品を完成することができるよう、教師がアドバイスするとともに、正しく記録することができるよう、学習プリントへの書き方を確認する。
----------------------------	---	---

### 本時の流れ

#### (1) 本時の目標

自分たちの作品を発展させるために、反復、変化、対照などの構成や全体のまとまりについて理解し、音楽づくりに生かすことができる。

#### (2) 過程

学習活動【学習形態】	目指す生徒の姿	教師の手立て
課題 ○○公園のカリヨンを参考にして、音楽を発展させよう。		
1. 本時の課題を掴む。 【一斉】	・カリヨンの音楽に反復、変化、対照などがどのように使われているか、全体のまとまりがどのようにになっているか捉えている。	★反復、変化、対照などの構成や全体のまとまりを捉えさせるために、音楽を鑑賞する際楽譜も配付し、教師が解説する。
2. どのように作品を発展させるか考える。 【グループ】	・反復、変化、対照などの構成や全体のまとまりを考えながら作品を発展させている。	★反復、変化、対照などの構成や全体のまとまりを考えながら作品づくりをさせるために、カリヨンの音楽と自分たちの音楽を時折比較させる。
<p>&lt;重点を置いた音楽科の資質・能力を発揮している姿&gt;</p> <p>★反復、変化、対照などの構成について「4回繰り返すのはあきるのでは?」「ここでリズムや速度を変化させたら面白いかも」「逆から音を出したら」などということを話し合いながら作品づくりをしている。</p> <p>★全体のまとまりを意識することについて、まとめ方の例に合わせながら音楽をつくっている。</p>		★全体のまとまりを意識させるために、まとめ方の例を複数提示し、その中から選択させる。
3. 活動を振り返る。 【グループ】	・完成した作品の演奏手順を学習プリントにまとめている。	・演奏手順をまとめることができるようにするために、表にアルファベットや記号を用いさせながら記入させる。

## 5. 授業を終えて

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

### 【話題になったこと】

- トーンチャイムという楽器の響きを楽しむ中で、「構成」という要素が入ってくことで、課題意識が生まれ、グループのテーマに合わせた音楽になるよう何度も音で確かめながら試行錯誤していた姿というのは、音楽の資質・能力が発揮された姿であった。
- 創作の授業が一番思考を巡らせると感じた。創作の授業が充実してくると音楽の力が高まってくると考えている。偶然出てきた音・音楽を子供たちは楽しんでいた。
- 導入の場面で公園の様子や楽器の音色を聴いたときに生徒の表情がとてもよかった。この場面で生徒たちは自分たちが作品づくりを行う根拠づけができていたように感じている。
- ▲「構成」という要素が入ってきたことで、響きを楽しむ、音で確かめるというよりも、どのように組み立てるかというところに意識が向いてしまい、なかなか音が出るまでに時間がかかってしまったグループもあった。課題として提示した創作しなければならない小節数が多かったのも、短くするなどの制限を少しかけてやらなければならないグループもあった。また、仕上げるのがゴールだということを、どのくらい生徒が把握していたのかが、なかなか作品作りが進まなかった原因の一つであると考えます。
- ▲トーンチャイムの響き方を考えるのがメインになってしまっていた。始めから音の重なりを考えさせたが、まず、単旋律をきちんと作成させてから重なりを感じさせるとよりよかったのではないかと。
- ▲課題提示について、前時に作成した曲を録音した後に、教師側から構成を考えると音楽がまとめるということを提示したが、録音したものをよりよくするためにどうするかということを考えさせてから構成の働きについて知識を得るとより学びが深くなったのではないかと考える。また、構成の要素についても反復はわかりやすいが、変化・対照は捉え方が多様で難しかった。3つでなくともどれか一つ取り出してもよかった。